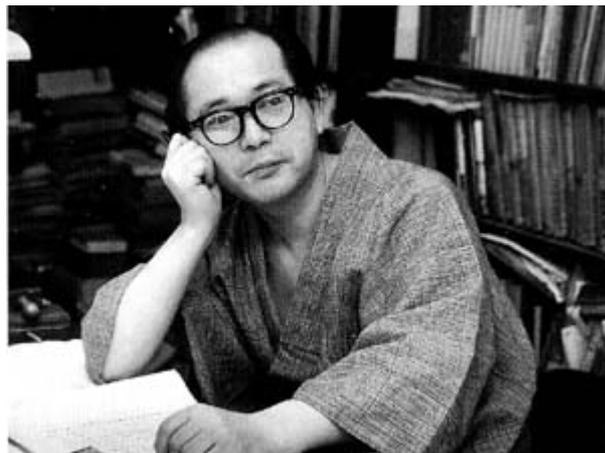


## 2人の富太郎（その2）～「唐澤博物館」～



大江戸線「新江古田」駅から5分ほど住宅地を歩くと、唐澤博物館があります。と言っても、普通の住居を改造して作られているので、よほど注意して探さないと見つけにくい施設です。

そして、この博物館が、今回のテーマである2人目の富太郎こと、唐澤富太郎博士（東京教育大学名誉教授）のお住まいということになります。

ここには、自ら収集された江戸時代から現代に至るまでの子どもの教育と遊びに関する貴重な資料の中から7000点余が展示・公開されています。

まずは入り口右手で二宮金次郎の像が、そして、頭上に「人間は教育によってのみ人間となることができる（カント）」の看板が格調高く出迎えてくれます。

1階は「教育の歴史」を振り返るコーナーで、江戸～昭和に至る教科書・教材、通知簿や卒業証書等が展示されており、福沢諭吉の「学問ノススメ」もあります。また、明治20年代に幻燈教育に使われた、教育勅語や人体の絵などが描かれたガラス絵は大変貴重なものです。

2階は「子どもたちの生活」を振り返るコーナーで、江戸時代の寺子屋が再現され、当時の教科書・筆や硯、文鎮等、また、江戸時代から昭和までのめんこなどの玩具、人形等がたくさん展示されています。とりわけ、学問の神様である菅原道真の人形の数には圧倒されることでしょう。

3階は「日本人の暮らし」をテーマに、庶民の日用品・装身具、旅道具等の民具が展示されています。

学校や家庭で日常使われていた品々は、時が経つにつれ、次第に無くなってしまいうのですが、そうならないうちにと、博士が長年かかって全国から収集したこれらの貴重な資料のおかげで、当時の暮らしの一端を知ることができます。

最後に、家人の回想として語られている、生前の博士のエピソードの1つをご紹介します。

「音のするものが大嫌い。ラジオ時代はニュース以外はわが家は御法度。テレビ時代となって驚いたのはプロレスの力道山の試合はかかさず見たこと。それも尋常一様の観戦ではなく、力を入れすぎて気分が悪くなり、冬でも突然来ているものを脱ぎすて、頭を冷やしに庭に出ま

す。見ればそうなることが分かっているながら必ず見ました。見た後、猛然と研究意欲が湧き出たそうです。」

素晴らしい施設ながら、残念なことに知る人が少なく、また管理も大変なことから、いつも門は閉ざされています。必ず事前に連絡されてから訪問なさってください。(電話 3991-3065)

なお、このコラムは「唐澤博物館十周年記念誌『愚徹』」(唐澤博物館刊)を参考にしました。タイトルの「愚徹」とは、「愚を徹した境地を極めたい」との思いから名乗られた博士の号です。